

令和元年6月16日現在

機関番号：34316

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02190

研究課題名(和文)近代移行期における日本仏教と教化

研究課題名(英文) Japanese Buddhism and Kyoka during the Transition to the Modern Period

研究代表者

岩田 真美 (IWATA, Mami)

龍谷大学・文学部・准教授

研究者番号：90610642

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、19世紀という近世から近代への転換期における仏教をはじめとした「教化」や「宣教」の活動、さらには他宗教に対する排斥運動に着目し、その展開と思想的変容を検討することである。近世・近代における宗教研究は、とりわけ仏教を中心に、近年大きく展開しつつあるものの、お互いに自らの時代区分のなかに留まっている傾向にある。本研究では、両時代の研究成果を総合的・連続的に捉え直し、近世から近代への転換期において大きく変容していく「教化」という「実践」を通して、19世紀日本の宗教世界を描き出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、これまで分断点として捉えられがちであった幕末維新时期について、これを結節点として再定義したことにある。特に、従来まで個別に研究されてきた近世と近代における仏教をはじめとした宗教空間について、両者の架橋を試みる研究を行い、成果として、岩田真美・桐原健真編『カミとホトケの幕末維新交錯する宗教世界』(法蔵館、2018年)を公刊した。

本書は学術雑誌のみならず、新聞や一般誌でも紹介され、高い評価を得ることができた。幕末維新という時代への視座に、仏教をはじめとした宗教という新たな枠組みを一般社会に対して提示することができたことは、本研究における大きな社会的意義であると言える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to reveal developments and metamorphoses of religion including Buddhism in the nineteenth century as a period of transition to modern through investigating the actual conditions of “kyoge / kyoka” (教化: teach and convert), “mission” and heathen exclusionism. In recent years, the studies on Japanese religions especially Buddhism in the early modern times or modern times have made great progress. However, most of these studies show tendency to stay their own fields based on the historical periodization. This study comprehensively rethought these research results of each age in “a sequence”, and described the religious world in the nineteenth century Japan with a focus on “practice” like “kyoge / kyoka”, which had shown big changes in a period of transition to modern.

研究分野：宗教学

キーワード：宗教と教化 近世仏教と近代仏教 護法論 排耶論 仏教 儒学 神道 キリスト教

### 1. 研究開始当初の背景

21世紀転換期ごろより、近世日本における仏教の社会的・思想的な役割をめぐる研究は大きく展開した。具体的には、高埜利彦『近世日本の国家権力と宗教』(東京大学出版会、1989年)を始めとする成果によって、近世の宗教世界を描くための新しい視座が提示された。さらに2000年代に入ると、引野亨輔『近世宗教世界における普遍と特殊』(法蔵館、2007年)や、澤博勝『近世宗教社会論』(吉川弘文館、2008年)などが発表され、それまで近世日本の仏教を語る上での主なパラダイムであった「近世仏教墮落論」がますます力を失っていった。

一方、近代日本仏教の分野も21世紀には、「隆盛期」と言ってよいほどの潮流が始まる。例えば、大谷栄一による在家仏教運動とナショナリズムの研究(『近代日本の日蓮主義運動』法蔵館、2001年)や、末木文美士思想史的研究(『明治思想家論』・『近代日本と仏教』トランスビュー、2004年)、谷川穰の教育史研究(『明治前期の教育・教化・仏教』思文閣出版、2008年)など、いずれも独自の視点から、学術上の諸分野を止揚させた研究である。

このように近年、近世および近代の仏教研究は、それぞれ大きく展開した。しかしそれは時代区分という枠組みのなかで語ることに留まっており、これらの時代に関する成果を総合的・連続的に捉えた研究はいまだ少ない。とりわけ近世と近代とを跨越する形での「19世紀学」的な研究は、緒に就いたばかりである。加えて、近代移行期における「国家神道」形成の研究が近年かなり進展しているものの、これを仏教史の成果との関連において考えようとする研究は、いまだ皆無に等しいのが実状である。また上記の谷川が指摘するように、宗門による「教化」は天皇制国家の成立期において不可欠なものであった。だが、大教宣布運動が日本仏教における大きな転換点であるにも関わらず、その前後での仏教の庶民教化の展開を検討した研究は少ない。多くの先行研究が示しているように、維新以降の宗門は、明治初年における「三条教則」の教導活動を始めとして、1870年代～80年代の国民道徳をめぐる問題や、20世紀転換期の宗教法を中心として展開された諸論争において主要な役回りを果たしてきた。こうした動きのなかで明治国家が仏教の諸宗に期待していたのは、「民衆」との密接な関係を有する彼らの「教化」の能力であった。周知の如く、現在に連なる形での寺院と「民衆」との関係は近世に始まるものであるが、近代の国民国家形成期において、宗門による「教化」の能力は以前にも増して重要視され、新たな体制の下での自己の必要性を主張するための強力な武器となった。

近世および近代における仏教史の研究が、近年、顕著な成果がみられるようになったことは既に述べた通りである。しかし、近代日本の仏教界において中心的な課題であった「教化」について、近世後期から明治末期を通史的に考察しようとするものはみられない。そこで本研究では、先学による成果をふまえつつ、いまだに語られざる「教化」を取り巻く19世紀日本の宗教世界を描き出したいと考えた。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、近世から近代への移行期の仏教における「教化」活動とその際に作成された諸テキスト等を通して、その思想的変容を明らかにすることにある。すなわち、幕藩体制下では仏教教団が自宗の檀家以外を「教化(キョウケ、キョウゲ)」することは基本的に許されなかったが、近世後期にはこうした状況も次第に変質していった。さらに明治維新以降、新政府が従来の身分制を廃止し、いわゆる寺檀制度の束縛も無くなったことで、「教化」なるものは新たな可能性を有するようになった。とりわけ明治初期において展開した、天皇中心の国家を形成しようとする大教宣布運動における「教化(キョウカ)」のコンテキストで仏教者は「三条教則」との関係において自らの教義を再解釈し、これを人々に広めようと試みた。天皇制国家の成立期において宗教による「教化(キョウカ)」は不可欠なものであったといわれるが、当該期の仏教の「教化」に注目するような研究はほとんどみられない。一方で、近世・近代の仏教研究は、近年それぞれに大きく展開しつつあるが、両時代の成果を総合的・連続的に捉えようとする研究もいまだ少ないのが現状である。

本研究では宗教的なピリーフとそのプラクティスが同じ事柄の両面として現れる「教化」なる実践を通して、19世紀の日本における仏教の存在形態を問い直し、近世および近代の仏教史研究双方の成果を架橋するような総合的な語りを描き出すことを目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究は、近世後期における「教化」の理解を示すテキストとしての『妙好人伝』すなわち「篤信者」の伝記集が刊行される1840年代から、宗門による陳情・請願運動によって、近代日本初の宗教法案が否決される1900年までの時期を対象とした。いわゆる檀家制度が機能していた幕藩体制において、人々は自らが「邪宗門」たるキリシタンでないことを明かすべく、諸寺院から「寺請証文」を受けるためにその「檀家」となる義務を課せられていた。こうして「檀那寺」は「檀家」を制度的に保証され、社会的・経済的安定を手にしたが、一方で、その「教化」活動は極めて限定的な形でしか許されなくなった。それゆえ近世の「教化」実践の事例は必ずしも多くはないのだが、『妙好人伝』はその数少ない例の一つである。幕藩体制の枠内で人々の「教化」を目指したこの理想的信徒の伝記集の刊行は、19世紀前半における浄土真宗教学の主要な事業の一つであった。こうした「教化」の経験を有した同宗が、維新以降の国民教化において中心的な役割を果たしたことは偶然ではないだろう。新政府における太政官が、新たな宗教政策を展開するとともに、それまで政治とは没交渉であった諸宗の僧侶たちが次々と発言

していった。その際に彼らは、「教化」を回路として、新時代における仏教の位置づけを確立しようとした。「教化」とその実践は、一宗派に限らず、仏教界全体の問題へと展開していったのである。こうした近世から近代への移行期の「教化」における思想的営為の連続と断絶を明らかにすることは、いまだ解決されざる課題である。本研究では、こうした課題を解決するために、以下の3点を軸に検討を進めていった。

(1) 近世後期における「教化」の構造について、『妙好人伝』が現れた思想史的背景を検討した。18世紀末に編集事業が始まり、日米修好通商条約が締結される1858年によろやく刊行の完成をみる『妙好人伝』に焦点を当て、この時期の僧侶における庶民認識と、これを網羅的に描こうとした目的を検討した。(2) 明治初年における「教化」の展開について、大教宣布運動下における仏教的「教化」言説の再編成に注目した。この時期以降、「教化」は仏教語の「キョウケ・キョウゲ」ではなく、神道者を始めとする多くの宗教者が担当した教導職の活動としての「キョウカ」へと変質していく。この「天皇制国家」の起点たる大教宣布運動を機に、宗門による「教化」の理想と実践の変容を検討した。(3) 国民国家の形成と「教化」について、国民道徳論と仏教の「有用性」について検討した。1880年代以降、国民道徳の立脚点に関する議論は、以前にも増して熱を帯びていく。仏教もまた、当時定着しつつあった「宗教 religion」概念の枠組みにおいてその役割が問われ、そのなかで庶民への「教化」が強調されていった。その際、仏教者によって盛んに行われたのが「演説」であり、その社会的意義をこれまでの「教化」の歴史的展開をふまえて検討した。

#### 4. 研究成果

本研究では日本の文化・社会・制度が大きく変容した幕末維新という時期における思想・宗教・文化研究にあらたな学的地平を切り開くべく、幕末維新时期の叙述を通して学問的断絶のみられる近世と近代を架橋させることを目的とし、宗教学・仏教学・思想史学・歴史学などを専門とする共同研究者によって、既存の時代区分を相対化した立場から、研究成果を発信することを試みた。

2016年7月30日には龍谷大学にて、海外から三浦隆司氏(アリゾナ大学)を招聘して、国際ワークショップ「近代移行期における宗教空間 課題と展望」を開催した。コーディネータはオリオン・クラウタウ、司会は星野靖二、コメンテータには上野大輔(慶應義塾大学)を迎え、桐原健真「内憂外患の時代 宗教モザイクとしての幕末維新」、三浦隆司「世直しとYonaoshi 幕末民衆運動と千年王国主義」、ジョン・ブリー「転換期にみる伊勢 参拝体験の再構築」、岩田真美「明治期の妙好人伝と教化 「妙好人」になった吉田松陰の家族」が発表された。2016年11月19日には、American Academy of Religion Annual Meeting(会場・San Antonio Convention Center [米国・テキサス州サンアントニオ市])において、パネルセッション An Ancient Doctrine for New Times: The Shinzoku Nitai in Modern Japanese Buddhism(司会: Daniel G. FRIEDRICH、コメンテータ: Micah AUERBACK、発表: Mark BLUM, "Shinzoku Nitai in Buddhism," IWATA Mami, "The Shinzoku Nitai Doctrine and Jōdo Shinshū in Meiji Japan," Orion KLAUTAU "The Two Truths in Modern Academia: Murakami Senshō and the Shinzoku Nitai," Jeff SCHROEDER, "Rethinking the Two Truths: The Interwar Views of Sasaki Gesshō and Kaneko Daiei," Gereon KOPF, "Shinzoku Nitai and the Development of 'Buddhist Philosophy': The Kyoto School and Beyond")を開催した。また2017年8月31日には、15th International Conference of the European Association for Japanese Studies(会場・Nova University of Lisbon [ポルトガル・リスボン市])において、パネルセッション Defending the Dharma in Nineteenth-Century Japan(司会: Paul L. SWANSON、コメンテータ: HAYASHI Makoto、発表: Janine T. SAWADA, "Buddhist Apologetics: Defense or Reinterpretation?," Orion KLAUTAU, "By Pen and Sword: Varieties of Gohō Strategies in Bakumatsu Japan," HOSHINO Seiji, "Buddhist Apologetics around 1880: Wakeikai and Buddhist Speech [Bukkyō enzetsu 仏教演説]")を企画した。2017年9月16日には、日本宗教学会第七六回学術大会(会場・東京大学)にて、パネルセッション「仏教における 教化の諸相 近世から近代へ」(代表: 岩田真美、司会: 星野靖二、コメンテータ: 谷川穰、発表: 芹口真結子「近世における東本願寺僧侶の教化活動 加賀藩領を事例に」、星野靖二「明治一〇年代の仏教演説における教化の諸相」、岩田真美「明治期の妙好人伝と女性教化」、ユリア・ブレニナ「田中智学の日蓮主義運動における教化の諸相」)を開催している。さらに2017年10月28日には、日本思想史学会2017年度大会(会場・東京大学)において、パネルセッション「カミとホトケの幕末維新 交錯する宗教世界」(代表・司会: 桐原健真、コメンテータ: 林淳、発表: 桐原健真「すべては「排耶」から 幕末維新の宗教空間における水戸学の位相」、青野誠「民衆宗教」概念の形成と変容」、上野大輔「神仏分離研究の視角をめぐって」)を開催した。上記のように国内外の学会や研究機関において成果を発信し、研究活動を展開してきた。

これらを踏まえ、その総まとめとして2018年11月15日には、岩田真美・桐原健真編『カミとホトケの幕末維新 交錯する宗教世界』龍谷叢書46(法蔵館)を上梓することができた。こうした成果によって、本研究では19世紀日本の宗教におけるあらたな一面を描き出すことができたと思う。いまだ残された課題も多くあることと思うが、一国史・宗派史あるいは近世・近代といった枠組みや通念を乗り越えて、知られざる幕末維新时期の宗教世界を「教化」という視点に注目することで、提示できたことは大きな成果だったといえよう。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者には下線)

[雑誌論文](計 36 件)

1. KIRIHARA Kenshin, “The Birth and Growth of Teikoku Nihon in Bakumatsu Japan: A Discursive Approach” 『金城日本語日本文化』 95 号、金城学院大学日本語日本文化学会、2019 年、1-14 頁、査読なし
2. 岩田真美 「明治期の真宗における女性教化——「妙好人」楳取希子と小野島行薫を中心に」 『真宗学』 137・138 号、2018 年、345-363 頁、査読なし
3. 岩田真美 「幕末護法論と儒学ネットワーク——真宗僧月性を中心に」 岩田真美・桐原健真 編 『カミとホトケの幕末維新——交錯する宗教世界』 法藏館、2018 年、139-161 頁、査読なし
4. 岩田真美 「妙好人」大谷栄一・菊地暁・永岡崇編 『日本宗教史のキーワード——近代主義を超えて』 慶應義塾大学出版会、2018 年、223-228 頁、査読なし
5. 桐原健真 「排耶と攘夷——幕末宗教思想における後期水戸学の位相」 岩田真美・桐原健真 編 『カミとホトケの幕末維新——交錯する宗教世界』 法藏館、2018 年、167-191 頁、査読なし
6. 星野靖二 「幕末維新期のキリスト教という「困難」」 岩田真美・桐原健真 編 『カミとホトケの幕末維新——交錯する宗教世界』 法藏館、2018 年、265-288 頁、査読あり
7. 星野靖二 「日本文化論の中の宗教 / 無宗教」西村明責任編集 『隠される宗教、顕れる宗教——いま宗教に向きあう 2』 岩波書店、2018 年、187-203 頁、査読あり
8. クラウタウ、オリオン 「近世後期の仏教と自他認識の転回」 『日本思想史学』 50 号、ペリかん社、2018 年、12—19 頁、査読なし
9. クラウタウ、オリオン 「日本宗教史学における廃仏毀釈の位相」 岩田真美・桐原健真 編 『カミとホトケの幕末維新——交錯する宗教世界』 法藏館、2018 年、51-73 頁、査読なし
10. 桐原健真 「会沢正志斎と「水戸学」の系譜——幕末から戦後まで」近代茨城地域史研究会編 『近世近代移行期の歴史意識・思想・由緒』 岩田書院、2017 年、147-172 頁、査読なし
11. 桐原健真 「吉田松陰と明治維新——藩から「日本」への転回」 『環境会議』 47 号、2017 年、6,138-143 頁、査読なし
12. 桐原健真 「モノとしての書籍——会沢正志斎をめぐる」 『日本思想史学』 49 号、2017 年、35-36 頁、査読なし
13. 桐原健真 「「尊王攘夷」とはなにか——水戸学の思想と行動」茨城県立歴史館編 『志士のかたち——桜田門、天狗党、そして新選組』 茨城県立歴史館、2017 年、1-5 頁、査読なし
14. 星野靖二 「神道指令後における新しい神道の構想——岸本英夫の神道論をめぐる」吉駒明子・伊藤彌彦・石井摩耶子編 『現人神から大衆天皇制へ——昭和の国体とキリスト教』 刀水書房、2017 年、109-135 頁、査読なし
15. Klautau, Orion, “Pensamento japonês: Uma ideia em (re)construção”, *Anais do XI Congresso Internacional de Estudos Japoneses no Brasil/ XXIV Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa, Manaus:UFAM, 2017*、査読なし
16. 岩田真美 「森龍吉——仏教近代化論と真宗思想史研究」オリオン・クラウタウ編 『戦後歴史学と日本仏教』 法藏館、2016 年、185-204 頁、査読なし
17. 桐原健真 「吉田松陰の視点——攘夷とは何か」福井県鯖江市教育委員会文化課編 『安政の

大獄の真実 幕末史における再評価——間部詮勝シンポジウム記録集』福井県鯖江市教育委員会文化課、2016年、2-14頁、査読なし

18. 桐原健真「服部之総——「生得の因縁」と戦後親鸞論の出発点」オリオン・クラウタウ編『戦後歴史学と日本仏教』法蔵館、2016年、49-75頁、査読なし
19. KIRIHARA Kenshin, “The Birth of a Myth: Civil War and Sacrifice in Early Meiji Japan”, *Anthropoetics vol.22 no.1*, 2016、査読あり
20. 星野靖二「清沢満之の「信」——同時代的視点から」山本伸裕・碧海寿広編『清沢満之と近代日本』法蔵館、2016年、113-138頁、査読なし

〔学会発表〕(計 51 件)

1. 桐原健真「「尊王攘夷」とは何だったのか?——言説的考察」, The Meiji Restoration Revisited: Culture, Religion, and the State (招待講演) 2018年12月17日、東北大学
2. HOSHINO, Seiji, “The Development of Knowledge about Religion(s) in Meiji Japan: Takahashi Gorō and His Opponents”, The First Tohoku Conference on Global Japanese Studies (招待講演), 2018年12月16日、東北大学
3. 岩田真美「幕末の護法論——交錯する宗教世界」, 龍谷大学世界仏教文化研究センター研究ワークショップ(招待講演) 2018年11月28日、龍谷大学
4. クラウタウ、オリオン「廃仏毀釈の近代的位相」, 日本思想史学会 2018年度研究大会、2018年10月14日、神戸大学
5. 星野靖二「明治前期における仏教者のキリスト教観——『明教新誌』を中心に」, 日本宗教学会第77回学術大会、2018年9月9日、大谷大学
6. 星野靖二「明治一〇年代の仏教メディアの再検討——「新仏教」に至る道筋として」, 日本宗教史懇話会サマーセミナー(招待講演) 2018年8月28日、長崎歴史文化博物館
7. 桐原健真「日本語による思惟の150年」, 日本文芸研究会第70回大会シンポジウム「明治150年を振り返る」(招待講演) 2018年6月16日、東北大学
8. クラウタウ、オリオン「「宗教」概念を考える——近代日本における「宗教」としての仏教の生成」, 第19回「親鸞仏教センター研究交流サロン」(招待講演) 2018年6月1日、親鸞仏教センター
9. 桐原健真「幕末志士の読書ネットワーク」, 山口県図書館協会ほか主催「第19回 図書館振興県民のつどい」, 2017年11月4日(招待講演) 萩市立萩図書館
10. クラウタウ、オリオン「近世後期の仏教と自他認識の転回」, 日本思想史学会創立50周年記念シンポジウム「対立と調和」(招待講演) 2017年10月29日、東京大学
11. 桐原健真「すべては「排耶」から——幕末維新の宗教空間における水戸学の位相」, 日本思想史学会 2017年度大会、2017年10月28日、東京大学
12. 岩田真美「明治期の妙好人伝と女性教化」(パネル「仏教における 教化 の諸相——近世から近代へ」), 日本宗教学会第76回学術大会、2017年9月16日、東京大学
13. 星野靖二「明治一〇年代の仏教演説における教化の諸相」(パネル「仏教における 教化 の諸相——近世から近代へ」), 日本宗教学会第76回学術大会、2017年9月16日、東京大学
14. クラウタウ、オリオン「日本仏教——近世から近代へ」, 真宗大谷派教学研究所以講演(招待講演) 2017年6月16日、真宗大谷派教学研究所以
15. 星野靖二「九州における仏教演説——和敬会を中心に」, 日本近代仏教史研究会第25回大会、2017年6月3日、東北大学

16. IWATA Mami, "The Shinzoku Nitai Doctrine and Jōdo Shinshū in Meiji Japan", IASBS Panel Session (2016 AAR), 19/11/2016, San Antonio, TX (USA)
17. Klautau, Orion, "The Two Truths in Modern Academia: Murakami Sensho and the Shinzoku Nitai", IASBS Panel Session (2016 AAR), 19/11/2016, San Antonio, TX (USA)
18. Klautau, Orion, "Replacing Persecution: Haibutsu Kishaku in Early Showa Historiography", 2016 American Academy of Religion Annual Meeting, 19/11/2016, San Antonio, TX (USA)
19. 星野靖二「明治前期「宗教」論の再検討—宗教メディアという場に即して」、日本思想史学会 2016 年度大会、2016 年 10 月 30 日、関西大学
20. 星野靖二「明治前期宗教メディアの再検討—翻訳論説を焦点として」、日本宗教学会第 75 回学術大会、2016 年 9 月 10 日、早稲田大学

〔図書〕(計 4 件)

1. 岩田真美・中西直樹編『仏教婦人雑誌の創刊』(編著)法蔵館、2018 年、全 339 頁
2. 岩田真美・桐原健真編『カミとホトケの幕末維新—交錯する宗教世界』(編著)法蔵館、2018 年、全 383 頁
3. 桐原健真『松陰の本棚—幕末志士たちの読書ネットワーク』(単著)吉川弘文館、2016 年、全 202 頁
4. クラウタウ、オリオン編『戦後歴史学と日本仏教』(編著)法蔵館、2016 年、全 382 頁

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：桐原 健真

ローマ字氏名：KIRIHARA, Kenshin

所属研究機関名：金城学院大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号(8桁): 70396414

研究分担者氏名：星野 靖二

ローマ字氏名：HOSHINO, Seiji

所属研究機関名：國學院大學

部局名：研究開発推進機構

職名：准教授

研究者番号(8桁): 50453551

研究分担者氏名：クラウタウ オリオン

ローマ字氏名：KLAUTAU, Orion

所属研究機関名：東北大学

部局名：大学院国際文化研究科

職名：准教授

研究者番号(8桁): 10634967

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。